展示「あの話ってこんなストーリーだったの!？知ったらハマる古典文学」関連講演会

本当に不運だったの？『方丈記』の作者・鴨長明の人生を読み解く

講師　二松学舎大学文学部教授　磯　水絵氏
日時　平成２６年４月１８日１８：００～１９：３０
会場　千代田図書館９階特設イベントスペース
プロフィール
二松学舎文学部国文学科教授。博士（文学）。
専門は中世説話文学、随筆。主編著は、『説話と音楽伝承』（和泉書院）、『『源氏物語』時代の音楽』（笠間書院）、『大江匡房』（勉誠出版）、『今日は一日、方丈記』（新典社）等。

１．司会者あいさつ

こんばんは。私は千代田図書館で企画を担当しております林と申します。本日の講演、「本当に不運だったの？『方丈記』の作者・鴨長明の人生を読み解く」は、「あの話ってこんなストーリーだったの!？知ったらハマる古典文学」に関連して開催します。今回の展示は日本文学検定委員会さんとともに作成したクイズを通して、古典の面白さを紹介する展示になっております。

またこの講演会はＮＰＯ法人神田雑学大学さんとの共催で開催されております。この場を借りましてご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

それでは本日の講師の先生をご紹介いたします。二松学舎大学文学部教授の磯水絵先生です。（拍手）

磯先生の御専門は中世の説話文学で、『説話と音楽伝承』（単著）ほか、『今日は一日、方丈記』（共著）などの著作がございます。では、磯先生宜しくお願い致します。

２．磯水絵先生講演

【『方丈記』のもう一つの解釈に向けて】

皆様、本日はお天気が悪い中をよくお出でくださいました。二松学舎大学の磯でございます。これから９０分私にお付き合い願います。

さて、『方丈記』につきましては、この角川日本古典文庫『方丈記』（簗瀬一雄訳注、角川書店、昭和４２年初版）の表紙カバー裏に、「賀茂社の社司になろうとして果たさなかった鴨長明が、失意の末、日野山の奥、方丈の草庵に世を遁れ、変動期の世相を眺めながら、不安と敗北感の中で厳しく自己を見つめ仏の道に救いを求めようとする心境を語る。中世隠者文学の代表作（以下、省略）。」と紹介されていますが、果たしてそうなのでしょうか？

ここで考えなくてはならないのは、不運という言葉を、どの方向から言うかということです。今の社会のようにいわゆる勝ち組、負け組などという色分けの仕方をすれば、彼は確かに負け組なのかもしれません。ですが、人生というのはそれだけではないわけで、今こうして『方丈記』が、８００年後にも語り継がれているということを考えれば、長明はなかなかに幸せ者かもしれない、というのが私の考えであります。それにつきましては、「『方丈記』とは何ぞや」というところから問題にしなければならないと思いますが、『方丈記』は、『枕草子』・『徒然草』と一緒に括り、三大随筆と言ってしまってよいものでしょうか？

現在の中世文学研究の世界においては、『方丈記』に関して軌道修正がはかられているところです。私は、その軌道修正を考えている方の人間なので、本日、皆様が私の話を聞いてくださって、「えーっ？」と思われましたら、どうぞご質問ください。それについて話し合いをすることにより、『方丈記』がどういう方向性で書かれているものなのか、それを段々と皆様にご理解いただけることになるのだろうと思います。

さて「本当に不運だったの？」という本日の題目のキャッチコピー、惹句、つまり聴衆をひきつけようという一文は、この図書館で企画に当たっておられる司会の林さんがお付けになったものですが、こうして改めて、「本当に不運だったのか」と問いかけられてみますと、「うーん、どうなのだろう」と唸ってしまいます。

【『方丈記』に描かれる五大災厄】

では、鴨長明の年譜から見ていってみましょう。

先ほど林さんは、「かものちょうめい」とおっしゃいましたが、私は、「かものながあきら」と呼んでおります。私の名前は「いそみずえ」ですから、「いそすいかい」と呼ばれたら私は返事をしません。「ちょうめい」と呼ぶのは、その「すいかい」と呼ぶのと同じことです。実際に当時の『源家長日記』、これは鴨長明とリアルタイム、同じ時期に生きた源家長（～１２３４年没）の日記というか、回想録ですが、その中に、「鴨長明の事」という一文がありまして、そこに平仮名で、「ながあきら」と書いてあります。ですから、その当時は「鴨長明（かものながあきら）」というのが彼の出家前の名前（俗名）であったことがわかります。因みに、出家後は「蓮胤（れんいん）」という法名を名乗りました。これは『池亭記』という住居記を書いた彼の敬愛する慶滋保胤（よししげのやすたね、～１００２年没）に倣って、「胤」という字をつけたのではないかと言われているものですが、そのようなわけで、私はこれからも、「かものながあきら」と発音してまいります。

まず、『方丈記』本文中に著されている伝記的記述を確認しておきましょう。

『方丈記』には平安末期に京の都で実際に起こった大火、辻風（竜巻）、遷都、大飢饉、大地震という５つの大きな災厄が、序に続いて著されています。

それらを五大災厄と申しますが、『方丈記』にはそれが、「去安元三年四月廿八日カトヨ」という書き出しで始まる安元の大火（１１７７年）の記事、「治承四年卯月ノコロ」で始まる治承４年

（１１８０年）のつむじ風（竜巻）の記事、「治承四年ミナ月ノ比」で始まる治承４年６月２日の福原遷都の記事と続けます。ここで、遷都が災厄、災害かということになりますが、京都の人々にしてみれば、まさしく青天の霹靂、災害だったのでしょう。で、４番目は「養和ノコロトカ」で始まる養和の大飢饉（１１８１年）の記事で、最後は「又ヲナシコロトカ」の書き出しで始まる元暦２年（１１８５年）７月９日に起こった大地震と、それらは時系列に著されています。

私は一昨年、京都の上賀茂の奥をタクシーで参りましたが、運転手さんに、「京都に昔大地震があったのよね」と、お話ししたところ、運転手さんは、「へーっ、京都は安全なところだから都が出来たと思うてました」というようなことを言っていました。喉元過ぎればではありませんが、「そんな前の話は知らんがな」ということなのでしょうね。私がそれを伺いながら思ったことは、「３．１１」の後、そんなに早く復興するわけはないのですが、京都のように東北もいつかは立派に復興するというのが本当なので、それを早めるかどうかは、私達の努力にかかっているのでしょうね。

さて、五大災厄の記事に戻りますが、長明は、その誕生以来３０代まで続いた源平の戦いについては、一字も書いていません。私達後代の人間にしてみれば、源平合戦は当時の人々にとってうっとうしかったと思われるんですが、清盛に関わることは福原遷都のみで、それは都が引っ越すという、まさに平安遷都以来４００年続いた都の一大事ですから、都人にとっては驚天動地の事で、清盛がどうのというのとはまた違う、とんでもない災厄として長明は描いているわけで、源平合戦とは全く別の次元で描いているものと考えられて、それは、あの京極の黄門藤原定家が、治承４年（１１８０年）９月の日記（『明月記』）の中に、「世上の乱逆追討耳に満つといへども、これを注さず。紅旗征戎、吾が事にあらず」と記したのとそれは通底するように私には考えられます。

定家と長明は、等しく源平の戦いについては触れていません。貴族の定家には平氏の源氏追討など他所事であったわけですが、それは長明にとっても同じであったということで、自分の足元が揺るがない限りは、武士の切った張ったは他所事であったというわけで、定家も長明も同じ立場にあったのです。

【幸せな家庭を築いていた 30 代までの長明】

日野 法界寺 ここに禅寂という友人が住んでいた。方丈庵はこのすぐ後方の外山にあった。

さて３０代までの長明をもう一度見てみましょう。長明は久寿２年（１１５５年）に誕生したとされていますが、確証はありません。ただ、この時に父の長継（ながつぐ）が１７歳で、しかも長明は次男で、当時すでに長男長守（ながもり）がいたということですから、誕生時期をこれ以上さかのぼらせることは難しいといえます。因みに、この当時の人々の生年は、天皇家か摂関家でない限りは記録がありませんから没年の年齢から逆算するのが通例ですが、長明の場合は没年月までしかわかっておりません。ですから、正確な生年はわからないのです。

さて、長明の没年を知る史料としては『月講式』を挙げることができます。これは中世文学の研究者堀部正二が発見したものですが、建保４年（１２１６年）７月１３日に、翌日の五七日（ごしちにち）、つまり長明が亡くなって３５日の法要に月講（がっこう）を行おうと、友人禅寂がその式文の草案を記したという、そうした経緯が式文の奥書によって知られるものです。この奥書によって、やっと没年月日が割り出されることになったのです。そして堀部は没した日を閏６月８日と算出しました。

つまり、長明の没年月日は最近まで判明していなかったのです。それが堀部によって明らかにされたわけですが、８日は堀部案で、別の研究家瓜生等勝は、１０日としています。この辺は亡くなったその日から計算するか、次の日から計算するかといった見解の相違で誤差が生じるわけですが、「閏六月」は動かないことになります。しかし、その死亡時の年齢は、これまた分かっておりません。分かっていないのに、なぜ没年時に６２歳と一般の年譜にあるのかと申しますと、これはまさに『方丈記』中の、「この時　六十路（むそじ）とか、五十路（いそじ）とか、三十路（みそじ）」とかある、その内部徴証から割り出されてきたもので、出家の歳を５０歳として案出されていますから、これも厳密には不明というのが当たっています。そういうわけで、実は長明の生年も没年も確証のある説とは言い難い事になります。が、先ほども申しましたように、没年月はこれでよいと考えられます。

ところで、没年を決定した史料として、今、『月講式』に目を止めていただきましたが、それは長明の友人禅寂が著したもので、この禅寂は、そうして追善供養をしてくれたばかりでなく、どうやら日野の外山の庵に住まう長明の面倒も見てくれていたようです。

日野の法界寺本堂の写真を持ってまいりましたが、禅寂はここを拠点に活動していた人で、浄土宗の開祖法然の弟子でした。法界寺は、京都市伏見区日野にあり、日野資業が永承６年（１０５１年）に創建したものですが、皆さん、浄土真宗の開祖親鸞聖人（１１７３～１２６２年）は御存じですね。彼もこの日野氏の出で、禅寂同様に法然に師事しますが、その親鸞が産湯を使った井戸もここにあって、別名乳薬師などと申しております。また、後年には室町幕府８代将軍足利義政夫人、日野富子（１４４０～９６年）もここに住まっておりました。ここは日野氏の拠点であったのです。その拠点の法界寺の当時の主が禅寂でした。そして彼が住んでいたこの法界寺の外山、この日野の外山に長明の方丈庵は建てられていたのです。お出でになった方はいらっしゃいますか？（お一人手が上がりました。）

行ってみると、案外、そんなに遠いところではないんですよね。法界寺の裏に回りまして、私が伺った時には、手前に飯ごう炊飯場などがありまして、そのもう少し山の上の方に『方丈記』の庵がありました。私のゼミの後輩連は、そこに何年かに一度、仲間同士で行っては、その方丈庵の跡と思われる所に建立された記念碑の前で『方丈記』全文を読み上げるというのを行事としておりますが、それが出来るくらいに、実は『方丈記』というのは短い、４００字詰め原稿用紙に換算すると、２２枚くらいの作品なのです。ですから読みあげられるわけですが、私も一昨年の『方丈記』成立８００年祭の時には色々な高校とかに参りまして、１時間で読めますよと言っては読んで参りました。実はここでもそれをやろうかと思いましたが、もう皆様はおそらくお読みになっていらっしゃるだろうと、それは止めました。そうして実際の地に行ってみますと、日野の外山というのは案外に法界寺の近くなのです。ですが、今のように街路灯のあるときならいざ知らず、何もない時の山の上というのは、皆さんご想像になれますよね。

真っ暗なわけで、そうして考えると、私達には、「なんだ近いじゃないか」と思われる距離も実はあの当時にあっては近くなかったのではないかと思います。ただこの辺の考え方というのはなかなか難しくて、芭蕉忍者説がありますように、昔の人は、足は相当に今より速かったのでしょうね。よく私どもの間で

話に出るのですが、現代の仁和寺の若いお坊さん達が昔と同じように歩いて奈良に行って見ようと思いたって、朝早くに出かけたそうですが、日没になっても京都から出ていなかった、というのが笑い話になっています。そう考えてみたときに、「昔の人達は一体どれだけ歩くのが速かったのだろう？」ということになるのですよね。長明が後に鎌倉に下向いたしますが、その当時で私の計算では１４日くらい、２週間で行ったのだろうと考えていますけれども、本当に距離とか、時間というのは、私達の思うようには動いていないのではないか、というふうに思うところでございます。

話は飛びますが、長明のほぼ百年後を生きた『徒然草』の作者、あの兼好法師は、卜部兼好（うらべかねよし）というのが俗名で、その兼好を出家後音読みで「けんこう」といったのが彼の法名ですが、その兼好法師は大徳寺文書によりますと、正和２年（１３１３年）９月に山城国山科の小野庄、今の京都市山科区山科の内に、水田１町を９０貫文で買い取ったということが記録されています。それは退職した宮廷官吏で遁世者となったばかりの兼好の経済的基盤であったと推測されていますが、そのように世を捨てた隠遁者の身ではあっても、生きて行くには経済的基盤は不可欠でした。といって兼好もこれで老後は磐石というわけにはいかなかったようで、友人であった頓阿にこんな歌を贈っています。

よもすずし　ねざめのかりほ　た枕も　ま袖も秋に　へだてなきかぜ

「米たまへ銭も欲し」、要するに米や金を貸してくれというのを、格好良く、沓冠歌（語句を各句の初めと終わりに１音ずつ読み込む技法の歌）にしているのです。頓阿の『続草庵集』巻四に、兼好からの打診がこのように記されています。なお、詞書きには、「世の中静かならざりし頃兼好がもとより、よねたまへぜにもほしといふ事をくつかぶりにおきて」とあるのですが、これに対して頓阿は、返しに、「よねはなし　ぜにすこし」と書いて、これも沓冠に「よるもうし　ねたくわがせこ　はてはこずなほざりにだに　しばしとひませ」と、まあこういう形で、「米はなし、銭すこし」と答えているのですが、「貸してくれよう」、「これだけなら貸せる」というのを、こうして雅びに贈答しています。と、このようにやるせない贈答歌があるわけです。

さて、長明の場合はどうであったのでしょうか？世捨て人となるについては、やはり兼好が水田１町を９０貫文で買ったように、経済的なバックボーンがなければそれなりの隠遁生活は送れませんでした。では長明はどうしたのだろうかということを考えてみなければなりません。まず、長明が不運であったと目されるところを『方丈記』中に読んでみたいと思います。

わかかみ、父方の祖母の家をつたへて、久しくかの所に住む。その後、縁欠けて身衰へ、しのぶかたがた繁かりしかど、つひにあととむる事を得ず。 三十歳余りにして、更にわが心と、一つの庵を結ぶ。これをありし住居に並ぶるに、十分が一なり。居家ばかりを構へて、はかばかしく家を造るに及ばず。わづかに築地を築けりといへども、門を建つるたづきなし。竹を柱として、車を宿せり。雪降り、風吹くごとに、あやふからずしもあらず。所、河原近ければ、水の難も深く、白波の恐れもさわがし。

すべて、あられぬ世を念じ過しつつ、心をなやませる事、三十余年なり。その間、をりをりのたがひめに、おのづから、短き運を悟りぬ。 すなはち五十の春を迎へて、家を出で、世を背けり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官禄あらず、何につけてか執を留めん。むなしく大原山の雲に伏して、又五かへりの春秋をなん経にける。

（鑑賞日本古典文学第十八巻『方丈記　徒然草』冨倉徳次郎・貴志正造編、角川書店、1975年）

方丈の庵に住むまでというのが、こうしてダイジェストで、縮めて語られているわけですが、３０歳で１回家を出ているわけですね。これを出家と言っていいのかどうか？これはちょっと考えてみな

ければいけないのですが、今にして思いますと、もしかして五大災厄の最後のところで、家をやられたということはないのか、そんなことを考えてもいいのではないかというのが最近私の思うところなのですが、それよりももっと本当らしいのが、次の考えです。

なにかと言うと、家庭の破綻なんですが、それを持ち出すと、「ちょっと待て。長明は独身じゃないのか？」ということになるのではないかと思いますが、そうとも考えられないのです。

『方丈記』中の、「わかかみ、父方の祖母の家をつたへて、久しくかの所に住む」と、「三十歳余りにして、更にわが心と、一つの庵を結ぶ」という文脈の間にあったと推察される彼の人生を次に考えてみましょう。それについては、彼の家集『鴨長明集』に拠りますが、次のような和歌から、彼にも嘗て妻子のあったことが窺われます。７番の「父身まかりてあくる年、花をみてよめる」からご覧ください。

7　春しあれば　ことしも花は　咲きにけり　散るををしみし　人はいづらは
　　家の女郎花さかりなるとき、とほきところへまかるとて

26　あるじはと　とふ人あらば　をみなえし　やどのけしきを　見よとこたへよ
　　恋のこころを

79　うらみやる　つらさも身にぞ　かへりぬる　君に心を　かへておもへば
　　秋の夕に、女のもとへつかはす

85　忍ばむと　思ひしものを　夕ぐれの　風のけしきに　つひにまけぬる

恋の気持ちというものはなかなかに我慢しづらいもののようですが、また、次のような歌もあります。

86　つのくにの　こやのあしでぞ　しどろなる　なにわざしたる　あまのすまひぞ　ものおもふころ
　　おさなき子をみて

88 そむくべき　うき世にまどふ　心かな　子を思ふ道は　哀なりけり

こうした和歌の数々を見た時に、長明３０代までの間に、父方の祖母の家を継ぎ、そこでお父さんが１７歳で彼をもうけたように、早くに子をもうけ、一時は幸せな家庭生活を営んだのではないかということが推察されるのです。

それは、幼い子を見て自分の子はと思ったり、その前に恋の歌があったりという、この家集中の和歌を見たときに、素直に感じることが出来ると思います。また、これからご説明いたしますが、父方の祖母の家はそれなりに富裕であったと考えられて、菊大路、あるいは菊家と名乗った家柄と推察されておりますが、その家に彼は養子格で入っていて、養子格で入ったとなると、やはりそこでは跡継ぎを作るというのが命題でありますから、おそらく早くに嫁も娶り、そして子供も作ったのではないかと考えられます。ところが父親が早くに亡くなった。そしてそこにあったのは父方の母、祖母の家ですから、父親が亡くなったことによって、彼の地位が危うくなるという構図が考えられるのです。そうして父方の祖母の家とぎくしゃくし、家庭を失い云々ということがあったのではと推察されるのです。こうして家集の和歌と『方丈記』を両方読みあわせることによって、それは考えられることになるのです。

【３０歳で家を出た理由】

私は長明が嫌いです。（笑い）

こういうとおかしいみたいですけれども、好きな男は贔屓（ひいき）の引き倒しで、なかなか客観的に見られないのですよね。この長明はやはりそのまま素直に読んでいると、女々しい男なんです。こういう女々しさは私には理解出来ないところで、あまり好きじゃない。しかし、好きじゃないからこそ、

微に入り細に入り、うがってみていくことが出来るわけなんで、そんなふうに思っています。

よく学生にも、好きな所ではなくて、理解できない所、疑問な所をレポートにしなさいということを 申します。

「ここ大好き、だからここをやる」ということになると、どこからやっていいのかわからない。だってどこも好きだし、いいところなんですよね。だから書こうとすると、「うーん」ということになってしまうというわけです。

先ほど兼好の話をしたわけですが、兼好ほどに長明という人は冷静ではなかった気がいたします。『十訓抄』で言われるところでは、いわゆるお父さんの跡を襲って下賀茂社の禰宜、神官になりたかった。ところが、その神官になろうとすると、彼があまり社の仕事には一生懸命でなくて、和歌とか管絃にうつつをぬかしていたので、結局親戚に駄目だといわれ、親戚の子供の方が神官になってしまった。彼の席はなくなってしまった。それに怒って隠遁した。こうなんですね。でも、一寸待ってください。

長明は和歌にうつつをぬかしていたのでしょう？管絃にも手を染めていたんですよね。その素行不良の彼が、本当にその社の交らいが上手くいかなくて出家したのでしょうか？それをひとつ考えてみなければいけないと思います。

それからもう一つ考えてみなければいけないのは、では、それ前に彼はどうやって生きてきたのだろうかということです。

その一端については、今ほど、「３０歳までは父方の大祖母の家を伝えていた」と申しました。では、その父方の大祖母の家を伝えて、どういうふうにしていたのでしょうか？父方の大祖母の家で、まず最初に彼は７歳にして従五位下の位を買ってもらいます。これはその当時、高松女院と後に申します二条天皇の中宮の年給による叙爵を受けて、つまり、中宮が権利を持っていた官位を彼が譲ってもらって、まあはっきり言えば買ってもらったわけですが、そこで彼は７歳にして従五位下ということになります。そこで、彼はどういう風に名乗ったかというと、菊家の五位、つまり菊大夫と名乗ったわけです。彼は幼少の頃を父方の大祖母の家、つまり菊、あるいは菊大路家に入ったとみられています。そして、その後は和歌を俊恵法師に、琵琶を中原有安に習うというお坊ちゃまぶりです。まさに良家の子弟として英才教育を受けていたということになるのですが、先ほど申しましたように、長守という長男がいましたから、本来ならば、当然禰宜を継ぐのは長守のはずでした。ですが、この長守はどうも早くに亡くなってしまったようで、それがおそらく長明に、自分が父の跡を襲おうという、そうした気持ちを持たせたのかもしれません。けれども、ともかくそれ以前に彼は、父方のおばあさまの家でお坊ちゃま然として、位はもらうは、和歌は習わせてもらうは、琵琶は習わしてもらうはという、そして、嫁はめとらしてもらうは、子供は出来るはという、まさに絵に描いたような幸せな生活ぶりを味わったのだと思います。

ですから、そうした生活が３０歳を前にして全て水泡に帰したとするならば、おそらくそれは彼にとっては躓きであったことは確かだと思います。彼は父親同様、早く家庭を持ち、そうした生活をしていたにも関わらず、彼の父の早い死が、その祖母の家にあった彼に逆風になったのでしょう。３０歳余りで第一次の家を出る、という状況になるのは、そのような原因に寄ったものかと推察されます。

ここで少し視点を変えます。

先ほど申しましたが、下賀茂社の神官になろうとしての、いわゆる猟官運動に敗れたことは彼の蹉跌

であったと思います。しかし３０歳までに経験した５つの災厄はどうであったでしょうか？それは彼のみならず、都の人々にあまねく危害をもたらした、大きな災厄であったと考えられます。

神戸や東日本の大震災の惨状をテレビ等で目撃した身としては、当時の京都市中がどのような状況であったものか、今の状況からは想像もつきませんが、とんでもないことになっていたと思われます。それを現在方丈の庵に住む長明は、いかに都は住みにくいかを読者に納得させる、ドキュメントとしてここに配しているのです。そうして同じころに都にあった人々は、それに深くうなづいていたことでしょう。つまりこの五大災厄の部分は、都を遠く離れた日野の外山にある長明が、どうしてこの外山に住まうのか、否、都の中に住まわないのかを、読者に納得させるために書いたということが出来るのです。五大災厄の描写は、個人的なものではなく、読者と同じ視点で描いたものと言えるのです。そうしてその前後に記す自分史、長明の歴史は、自ずとそうしたブルーな色に染められていったのかもしれません。

次に、『方丈記』本文の「五　方丈の庵」の部分を見ていきますが、ここを長明のやせ我慢、虚勢を張っている部分というような捉え方をしてよいものでしょうか？

【『方丈記』の本質】

実は『方丈記』の本質はここから後にあります。

『方丈記』は、従来、『枕草子』・『徒然草』と並び称されて、三大随筆という捉え方をされてきました。が、その実は漢文体である中国白楽天の『草堂記』、あるいは日本の慶滋保胤の『池亭記』に倣った、和文体の住居記なのです。本来は漢文で書かれるべきものを敢えて和文で書いた住居記と言ってよいのです。その表現しようとしている内容は、方丈の庵が、いかに快適で、自分の心身に適った理想の住居であるかということなのです。そこを読み違えてはならないと思います。

「いやいや、磯が読み違えている」と言われるかもしれませんが、住居記といったときに、単に「ハウスの記」と取られては困ります。「家は人なり」というのは冨倉徳次郎先生のお言葉ですが、

家は住む人の人柄、性格全てを示すと言ってもいいわけですよね。あるいは、家はそこに住む人の文化度を表すと言ってもいいのかも知れませんが、そうして考えた時に、実は『方丈記』という書名からして、まず「何何記」という、これは漢文の文章体のひとつなわけですから。そしてそれは漢文の方でも一応随筆というふうに解説されますが、とにかく漢文の文章の一体として、事実をありのままにしるす「記」というものがあるのです。そしてその中には例えば富士山を褒め称えた『富士山記』とかもあるわけですが、それと同じように一つの区画を占めるのが住居記なんです。

住居記といってよい『池亭記』の文章が、実は『方丈記』の中には引用されています。ちょっと詳しい事を申しますと、『方丈記』には広本系と略本系がございまして、広本系のなかにはさらに流布本系と古本系という二つの種類があるのですが、広本系にはこの慶滋保胤の『池亭記』からの引用が沢山あるのです。今風に言うと、パクッたと言えるのかもしれませんが、日本の文学伝統として「本歌取り」

という和歌の作歌方法がありますが、それと同じように、そこはかとなく前代の何か、白楽天の何かといった、そういうものを文中に取り入れていくというのが、日本の文学伝統にあるのですね。そしてその文学伝統を深く味わえるか浅く味わうかというのは、読者の教養にかかっているわけです。そう考えてみますと、私どもは中世人の教養に迄はとても追いつかないわけですけれどもね。

そして白楽天は『草堂記』だけではなくて、『池上篇并序』とか、他にも幾つか住居記を書いておりますが、そうした「記」の伝統を日本でも受け継いで、『本朝文粋』などには沢山の住居記が見出されます。そういうわけで、白楽天の人となりを彷彿させるような住居記が、そして慶滋保胤の『池亭記』には保胤の気持ちを代弁するような住居記が展開していたわけです。

そうした漢文の「記」に対して、長明が新機軸で、和漢混淆文体、漢字カタカナ交じりと敢えて申しておきますが、漢字カタカナ交じりの住居記をここに作ったのだろうと私は考えております。

６０歳を過ぎて、あるいは６０歳を前にしてと言った方がよいのかも知れませんが、彼には庵の中で時間がたっぷりありました。その時間を、彼はこの原稿用紙で２２枚足らずの文章の推敲に費やしたのです。その費やした時間はある程度分かります。彼が日野の法界寺の世話になりながら日野山の奥に住まうようになったのがいつかははっきりわかりませんが、鎌倉幕府の事跡を日記体で記す『吾妻鏡』に、長明が５７歳の時のことが書かれています。それは建暦元年（１２１１年）１０月の１３日の記事ですが、引用しますと、「十三日辛卯。鴨社氏人菊大夫長明入道（法名蓮胤）雅経朝臣ノ挙ニ依ッテ此ノ間下向ス。将軍家ニ謁シ奉ルコト度々ニ及ブト云々。而ルニ今日幕下将軍ノ御忌日ニ当リテ、彼ノ法花堂ニ参リ、念誦読経ノ間懐旧ノ涙頻リニ相催ス。一首ノ和歌ヲ堂ノ柱ニ註ス。草モ木モ靡シ秋ノ霜消テ空キ苔ヲ払ウ山風」とあります。つまり、『吾妻鏡』の記事によると、彼は建暦元年の１０月１３日には鎌倉に在ったということがはっきりしているわけです。皆様、鶴岡八幡宮の東の白幡神社へお出でになったことはありますか？頼朝のお墓の階段下にあるのがそれで、そこが法華堂の跡なのですが、その前で長明はこの和歌を詠んだということになります。

５７歳の秋にこれを詠んでいる。では、いつ『方丈記』は成ったのかですが、成ったのは、建暦２年、次の年の三月晦日です。前年の１０月１３日に実朝に会って、いつ帰って来たのだろうと考えてみますと、早くても１１月ですよね。１１月、１２月、１月、２月、３月、この５カ月間で彼は『方丈記』を著わした。まあ、この間に著わしたと考えるのがたぶん正しいのだと思います。

『方丈記』で一般の皆様が御存じなのは広本系ですが、実はこれに対して略本系というのがございまして、この略本系には、先ほどからお話ししている五大災厄の部分が実はないのです。五大災厄がなくて、あるのは後半部分と最初の無常を語る序の部分になります。言い換えますと、先の５カ月の間に、彼はまずその五大災厄のないものを著わし、推敲の途次において、その五大災厄のない『方丈記』では、都の人に、今住まう外山の方丈庵がどんなによいか説得出来ないと気付き、そこで考えたのが、都の危うさを都の人々にあまねく知ってもらうことであった。そして、そのために五大災厄をここに描くことを思いつく、そういう経緯が考えられるのではないかということです。

この五大災厄のところにだけ、長明は読者を意識して、「侍り」という丁寧語をつかっています。面倒くさい事を申しますが、過去の助動詞として、「き」・「けり」というのがありましたね。直接体験の過去を示すのが「き」で、間接体験の過去を示すのが「けり」と、ざっくりですが言われています。

『方丈記』はこの五大災厄の部分だけに、その「き」を使い、そして、読者を意識して、「侍り」を使っているのです。私は、「侍り（はべり）」ではなく、「侍り（はんべり）」と発音していますけれ

ど、そこには読者に対する丁寧な気持ちが表れていると考えられるのですが、それが五大災厄の部分だけにある。つまり、五大災厄の記述のない、もともとの『方丈記』には、一に自分が住みやすいと考えている方丈の庵のことだけを書いていた。しかし、推敲をしつつ、これを読者に深く理解してもらおうと願って、彼は自分も経験し人々も等しく経験した都の危うさを描こうとしたということで、だからそこには読者を意識した丁寧な言葉使いが出て来たんだろうということです。

なぜ、このようなことを縷々話しているかと申せば、実は一昨年来、『方丈記』がルポルタージュであるということが喧伝されて、五大災厄の部分だけが、注目されてきた経緯があるからです。私としてはそこの部分は尾ひれであって、本当に彼が理解してほしいのは、方丈の庵の閑居の日々、この方丈の庵の住みやすさということなんだろうと考えています。そこのところが、これから『方丈記』をお読みくださる皆さんに感じていただきたいところなのです。

先ほど申し上げた略本ですが、略本と申しますから、広本が省略されたものというイメージになってしまうのですが、それでは少しまずいと思うのです。略本とは、省略に限らず、欠落などのために内容が少なくなった本を言いますが、『方丈記』のそれは、そうではなくて、出来れば最簡略本というようないい方をして頂きたいと思います。彼はその第一次稿本といった形の最簡略本に、方丈の庵の住みやすさを書いていき、それを読者に納得させようとしていた。ここで読者というのは、とりもなおさず都の人です。私達は読者として全国区でイメージしますが、この当時はそうはいかないわけで、ターゲットとしてあるのは、都の公卿、殿上人ということになります。ですから、ここで都の危うさを語るということは、つまり都人に世界の危うさを話していることと同じになるとご理解いただきたいと思います。

【略本から広本へ】

先ほど申しましたように、略本『方丈記』に著述されていることろは、方丈の庵における描写と、「行く川の流れはたえずして」で始まる序の部分です。この序の部分が、広本その通りに著わされているわけではありませんが、ほとんど同じように著されています。

その簡略本の序を読んでみますから、皆さんは広本の序の部分をご覧になりながら聴いてください。略本と広本でどれだけ違っているかを知って頂きたいと思います。これは長享本という略本の一本です。

ゆく河のながれはたえずして、しかも、もとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたのかつきえかつむすびて、ひさしくとどまることなし。

よの中にあるひとのすみかも、また、かくのごとし。もろもろの里々に、むねをならべ、いらかをあらそへる、たつときいやしき人のすまゐは、世々をへてもつきせぬものなれども、むかしあるは今はなし。あるひはこぞさかへて、ことしほろび、或はきのふつくりて、けふはやけぬ。すむ人これにおなじ。すがたもかはらず、ふるまひもおなじけれど、いにしへみしひとは、百人が中にわづかにひとりふたりのこれり。或は詞をまじへ、契りをむすびし人も、浅茅が原の露と消、或は名をきき、姿をみし人も、蓬がもとのちりとなる。又、朝に生れ、

夕に死するならひ、只水のうへのうたかたなり。

其ぬしとすみかと無常をあらそふさま、槿の露におなじ。ある時は、花よりさきに露こぼれ、あるときは、露よりさきにはなしぼむ。ぬしさきだちて、家のこるもあり、ぬしよりさきにほろぶる家　もありといへども、うれへならぬときは稀也。

（角川日本古典文庫『方丈記』）

と、このようにあるんですが、似ていますね。けれども、今、私が読みあげた略本の方がまずいですよね。つまり、推敲した跡がそちら、広本にあると考えれば、それが理解できるのですが、これがもし反対であれば、広本から略本へと申し上げてもよいのかと思います。ですけれど、文章というのは、なかなか良い方から悪い方にはならないのです。悪い方からだんだん良くなるのです。ですから、古典で申しますと、原態に近い古本より、衆人の目に触れている流布本の方が文法的に正しくなり、文章もしっかりまとまっていくのです。それが自然であって、人口に膾炙し、読みあげられているうちに、次第にこなれて、文章も正しくなっていくというのが、古典の文章の方向性なのです。ですから、考えてみますと、こうした出来の悪い文章から、第一にまず長明が推敲を重ねて、今の様な広本系に持っていったということが言えるのだろうと思います。

【長明は本当に不運だったのか？】

さて、こうしてお話ししておりますと、「ちょっと待てよ、今回の主題は何だったんだ？」ということになるかと思います。そこで私が申し上げたいのは、「だから本当に不運だったの？」と問われた時に、官位とか宮廷生活とか、社の交わりを考えた時には、彼は不運であったのかもしれない。しかし、一方において彼は後鳥羽院に抜擢されて、和歌所の寄人（よりうど）になり、貴人の歌合に出席したり、音楽の方でも師の中原有安が楽所預を務めた手練れでしたから、彼の仲介で九条兼実をはじめとする貴顕の許を出入りしたりしていたという現実があるわけです。ですからそれを考えた時に、私はここで不運だったと言ってよいのかどうか迷います。言い換えますと、先ほど申しましたように、神社務めをちゃんとしていたのか、という話になりますと、彼は文芸生活の方に比重をおいた生活をしていたわけです。またそれだけではなくて、幼少の頃に培った和歌の力、そして管絃の力によって、その後引き立てられていたわけで、蓮胤となった後にも歌合の席に登場しておりますし、その後に秘曲尽くしなんてこともやらかしたわけです。

私がフルートの雑誌に連載している笛物語という読み物に、『方丈記』８００年祭にことよせて長明のことを書かせてもらいました。少し読ませていただきます。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」と始まる『方丈記』は、2012年3月に誕生800年を迎えます。そこで、来年には八百年祭を中世文学研究者は計画しているのですが、著者長明は、散文作家である以前に和歌管絃を能くする数寄者でした。彼は楽所預で、琵琶・箏（そう）・笛・太鼓の名手中原有安に琵琶を学んだとか。そこで、琵琶道史を著す『文机談』に、次のように描かれています。

さてこの有安には、鴨長明と世に知られた風流人も習つていたそうだ。（長明が三秘曲のうち）やっと「楊真操」を許されたところで、（有安は）死んでしまった。長明は和歌道に有名であったから、琵琶道にもまた世間に評判の名人であったとか。

そんな長明が、ある時、賀茂の奥で「秘曲尽くし」をしでかしたのです。

音楽好きが高じたのか、ある時、世間に有名な管絃の名手をたくさん誘って、賀茂の奥の方の場所で

秘曲尽くしという事を催した。大納言藤原経通卿・中将藤原敦通朝臣・三品藤原実俊卿・中納言藤原盛兼卿と、(朗詠の名手)右馬頭源資時入道も同席され、「足柄」(今様)をお歌いになったとか。この外にもたくさんの人々が参会された。楽所には大神景賢・景基もおったそうで、篳篥の「小調子」、笙の笛の「入調」、笛の「荒序」、箏の「調子」等、各楽器の秘曲一切を皆で演奏し尽くした。本当に、人生とはこのようにしながら過ごしたいものだと思ったとか。願主の長明は、永年　想像していたそれより何倍もすばらしく思われたので、感に耐えかねて、琵琶の(最秘曲)「啄木」を数回弾いたとか。

（季刊「ムラマツ」Ｖｏｌ．１１３　２０１１年 秋号）

と、まあ「秘曲尽くし」という事件は、このようなものであったわけです。

これはコマーシャルではないのですが、今日お持ちした私どもの本、『今日は一日、方丈記』の後ろにはこの秘曲のＣＤが付いております。そのＣＤから琵琶の秘曲を聞いてもらいます。

（ＣＤ演奏）

このようなことが出来る長明に、お金がないのでしょうか？

『今日は一日、方丈記』
発行：新典社

楽人達を誘ったりするには反対給付がいるのです。それはほかの説話などから分かることなのですが、長明には、バックボーンとして禅寂が法界寺に控えており、おそらくはいくばくかの金品が、たとえば、元の家であるとか、どこからかもたらされていたのだと考えられるわけです。また、それだけではなく、こうして今お話ししたような貴族、楽人達を呼び集められるだけの力を持っていたということを考えた時、懐が空だったとは思えないわけです。

私が、兼好にしても長明にしても、決して不運ではなかったのだろうと思いながら、一番良かったなぁと思うことは、良き友があったということです。今の私達の友達関係はそこまでいかないのですが、昔は例えば居候までさせたのが友達です。家の中に住まわせたのが友達だったりしますよね。そこのところの感覚が、おそらく今の私達には、当時の彼等の関係を考えるのに、たぶん足りないところではないかと思うのです。例えば乳母子（めのとご）なんてことを考えてみても、生き死にまでも一緒にするのが当時の友達であります。ですから、長明一人、草庵一つを維持することは、友達にとって全然苦痛じゃなかったと考えられるのです。そして「秘曲尽くし」についても、反対給付があっただろうと申しましたけれども、たとえなかったとしても、みんなの秘曲が聞けるとなれば、音楽家は皆行きますよね。で、行って弾きっこしちゃったら、行かなかった人は怒りましよね。「ずるい」という話になるでしょう。

もうひとつ言うと、秘曲伝授の際には、やはり伝授される側はそれなりのお礼を差し上げなければならなかった。後々の家元制度を考えた時、このようなところでの秘曲披露にＯＫを出すわけはなかったわけです。実はそれで、後に長明は藤原孝道という琵琶道の宗匠から後鳥羽院（１１８３～９８年）に訴えられて都にいられなくなったと申します。

私はその都にいられなくなった時に行ったのが、先ほどの鎌倉ではないかと思っているのですが、長明には、鎌倉に縁のある飛鳥井雅経（１１７０～１２２１年）という友人がおりました。この方は蹴鞠の名手であり、もちろん和歌や楽器も出来た人ですが、その彼が失意の彼を鎌倉に誘ったということを考えたらおかしいでしょうか？

この鎌倉下向は、長明が実朝の和歌の師になろうとして鎌倉に下ったという意見が、現在までも、大勢を占めておりますが、待ってください、なぜなら、実朝にはもう藤原定家（１１６２～１２４１年）が師としてあったんですよ。権中納言定家を師としている実朝が、一介の地下人長明を師にしようとするでしょうか？それはなかなか考えにくい。やはり長明が鎌倉に下ったについては別の理由が欲しい。いや欲しいからではないんです。秘曲尽くし出席者の年齢を私は全部調べてみましたが、すると、この秘曲尽くしの開催時期はそう早くないことがわかりました。一番自然に考えられたのが、実はこの鎌倉下向の前だったのです。

彼は鎌倉に行って、何も手にすることなく帰ってきた。そこで方丈の庵での文章が、今、皆さんの前に展開しているということなのですが、それをあきらめのうちのことと取るかどうかは考え方ひとつ です。

考え方ひとつというと随分投げやりなようですが、はっきり申し上げて、皆さん、今、ご自分たちの終末期をどのように考えていらっしゃいますか？私には主人がおりますが、二人がどうやっても一緒には死ねないなぁ、どうしたらいいんだろうと常々考えております。一人で百歳までも生きたいとは思っていません。こうして飛んで回ってお話しをしていられるうちに死にたいのです。よく学生には私が心筋梗塞で授業中に倒れたら、助けるんじゃないと言って聞かせておりますが、それが一番幸せだと思っているのです。

それから後の幸せを、この『方丈記』の文章の彫啄に使った長明は、私は終末的には幸せであったのではないか、仏教とともにいられた彼は幸せだったのではないかと思っております。やはり生きていくのには、何かのよすががいるのでしょう。その最高のよすがは、阿弥陀様が西方浄土からお迎えに来てくれることというのがこの当時のことであったのだと思います。

ご静聴ありがとうございます。（拍手）

３．質疑

（質問）先生、広本と略本と言うのは２種類出版されたんですか？

（磯先生）いえ、まず出版という言葉が問題だと思うのですが、この当時は写本で伝播しているものですから、印刷されるということはなかったわけです。普通でしたら広本だけが、皆さんの目に触れているものだと思います。ところが今、私は角川文庫の簗瀬一雄先生のものを持っていますが、この中には広本と略本と両方が入っています。その略本は実は３種類あります。真名本と言う漢字で書かれたものと、それが少し長くなっている延徳本と、もう少し長くなっている長享本とがあるのです。つまり、長明の文章は、なかなか捨てられなかったということなのかなと思うのですが、『徒然草』は兼好が書いたと言われていますが、実は、それも疑わしいとのです。兼好が書いて草庵の中に持っていたものを、彼の傍でいろいろ小間使いをしていた侍童の命松丸が掻き集めて、今川了俊のところに持って行き、そこで編纂されたという伝説があるくらいです。この当時、『方丈記』のように５種類もの随分異なる伝本が残っているなんていうことはなかなか稀有のことだと思うのです。ですから、長明以外の人がそれを書いたなんてことも言われるわけですが。また、言い添えますが、勿論、先ほど申しました広本には何十冊もの写本が残っています。我々は江戸時代に作られた版本で流布したスタンダードを読んでいるわけですが、そういうわけでそれ以外にいくつもの『方丈記』が残っているのです。

（司会）時間が来ましたので、これにて終了とさせていただきます。ありがとうございました。